

あそびの研究 (4)

シルクロードのキジモの遊び

藤本 浩之輔

今から六年程前、京滋の大学生の間で、バイクを駆ってタクラマカン砂漠に埋没した幻の王国楼蘭に行ってみたいという計画が持ちあがった。楼蘭ブームの時期である。

調査方法や資金面で学生たちの相談にのっているうちに、同行する責任者が見つからず、結局私がそれを引き受けることになった。そこで、私の研究室の院生や中国からの留学生を調査担当として加え、「シルクロード友好親善隊」を組織したのであった。

シルクロードの起点長安（現在の西安）から出発したかったのだが、許可がおりず、甘肅省蘭州からの出発となった。蘭州で中国側の支援隊を加え、一九八九年三月二十二日出発。行程は約一か月であった。バイク隊と調査隊は、敦煌までの河西回廊を同道。

その後、バイク隊は、敦煌から青海省に南下し、北上して楼蘭に入り、タクラマカン砂漠を縦断してウルムチに至るといふ計画であった。ぎりぎりまで交渉を続けたが、結局楼蘭入りは許可されなかったため、バイク隊の

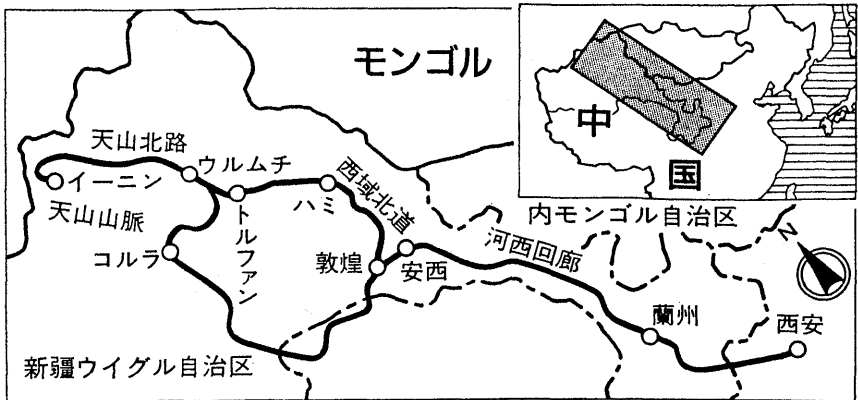
四名は、ローマまでシルクロードを完走することになった。

私たちの調査隊は、敦煌出発後、ハミ、トルファン、コルラ、ウルムチを経て、ソ連との国境イーニンに至り、引き返してウルムチでバイク隊と再会、そこで解散式という計画であった。調査隊の走行距離は三千キロに達した。

四月といっても、砂漠地帯の気温は、昼間は二十度程度まで上がるものの、夜はマイナス十度ぐらいまで下り、大きな落差があった。

河西回廊から西域北道にかけては、砂漠というより礫漠（ゴビタン）で、写真でみるような砂丘にはほとんど出会わなかった。

礫漠は、死の世界さながらであったが、オアシス地域に入ると、さすがに春の息吹、生命の躍動が感じられた。ポプラや柳の若葉が芽吹き、条件のよいところでは、アンズ、ナシ、ライラックなどの花が咲き、ブドウも葉をひろげ始めていた。農夫たちはロバやラクダを



▲シルクロードの調査経路

使って、延々とひろがる畠の耕作を始めていた。羊の群れにつきそっている老人は、悠然として南山を眺め、子どもたちが、棒をもって走り回っている風景もあった。

天山北路に入ると、万年雪をいただく、標高五、六千メートルの天山山脈が連なり、麓には枯色ながら草原の広がりがある。イリ地区に入るため天山越えをしたのだが、峠地帯はまだ一面の雪原がひろがり、湖は硬い氷に閉ざされ、吹きつける風は水のように冷たかった。

イリに下りると、延々とひろがる青い小麦畠の中に、黄色い花をつけた油菜畠が彩をそえ、かつての日本の農村を想い出させる風景であった。紹介されていたイーニンの中学校を訪問すると、ちょうど運動会が始まったところで、それは三日間つづくという。スケジュールは組織的ではなく、クラス毎の芸術体操や競技が断続的にこなわれており、ゆったりとした時間の流れを感じさせるものであった。

調査隊の主要な目的は、シルクロード沿いに子ども遊び文化を調べることであり、各地で二十七項目の調査

をした。ここでは、お手玉、石けり、凧あげ、こままわし、の四項目について、紹介しよう。

〈お手玉〉

日本の袋お手玉は、江戸時代の後期、一七〇〇年代に案出された特殊形である。それ以前は、小石を使ってする「石なご」とか「石などり」というゲームで、この名称は、平安時代のいくつかの和歌集に出てくる。例えば、西行法師は次のような和歌をつくっている。

石なごの玉の落ちくる程なさに

過ぐる月日はかはりやはする

私がこの石お手玉の残存に気がついたのは香川県の善通寺付近にあった「いちもん」という遊びで、昭和四三年頃のことだ。気をつけて調べてみると、石お手玉は昭和三十年代までは、西日本の各地でおこなわれていた。昭和四十年代に入るとことごとく消滅し、現在まで伝承しているのは兵庫県の大屋町だけであろう。

外国の場合は、記録的には日本よりかなり古い。大英

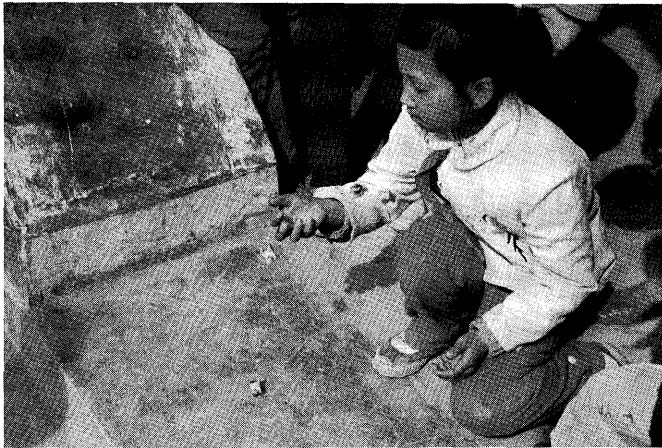
博物館のギリシア・ローマ室には、羊の距骨（後足のかかと部分にある小石状の骨）とする骨お手玉が展示されている。紀元前五百年頃のものである。トルコのアナトリア文明博物館には、ネオ・ヒッタイト時代のお城の石壁のレリーフに残された骨お手玉の図が保存されている。それは紀元前一千年頃のものと考えてよい。羊の距骨は、紀元前五、六千年にさかのぼるアナトリアの古代の村の遺跡からも発掘されている。

この骨お手玉の系統のゲームは、ヨーロッパに広く伝承されていて、英語圏では一般にナックルボーンズと呼ばれている。イギリスには、粘土を焼いてつくったファイズ・ストーンズがあり、アメリカには、金属性のジャクスがある。

というわけで、私は、シルクロードにはどのような形のお手玉がおこなわれているか、興味をもって調べてみた。

蘭州と安西の中間にある酒泉には、羊の距骨六個でする^{ツァツァチ}抓骨節があり、（三十歳ぐらゐの女性）、現在の男子中^{ツァンジー}学生は、小石五個でする抓石子をみせてくれた。

安西の小学校の先生にきくと、冬になると、子どもたちは抓骨節、抓石子もやっているけれども、しだいに少なくなっているということであった。五年生の女の子に



▲シルクロードの子どもの抓骨節（敦煌にて）

きくと、ごく当たり前のようにポケットから羊の距骨五個をとりだして、遊びをみせてくれたが、日本でおこなわれる石お手玉（石なご）のルールと非常によく似たものであった。

三千年も前から記録されており、ギリシアやローマ時代の子どもたちが一般的にやっていた遊びに、シルクロードでは出会えるだろうとひそかに予期はしていたが、現実の子どもの遊びとして生きているを目撃した時は感動的であった。

敦煌でも、子どもたちは、羊の距骨五個による抓骨節をやっていた。石による抓石子もあるが、抓骨節の方が多いということである。

ハミのウイグル族の子どもたちは羊の距骨五個で骨お手玉をしており、名称はガラという。しかし、小学校ではこれを禁止しているというので、その理由をきいてみると、地面の上でするので、手がよこれて不潔になるし、賭をするからということであった。

トルファンのウイグル族の小学校では、石お手玉がお

こなわれており、その名称は、オッホタッシュ・オイナッシと言ひ、石五個、あるいはピン球一個と石四個とする。

ウルムチ郊外のウイグル族の女性によると、石お手玉の場合は、グッシ・オイナッシといったが、羊の距骨の方は、遊びはあるものの名称は不明であった。イーニンに行くと、骨お手玉はなく、石お手玉をやっており、名称はベンタシということであった。

シルクロードのお手玉は、石または羊の距骨によるものであるが、すべての調査地点でお手玉はおこなわれていた。はじめに述べたように、日本でも一七〇〇年以前は石お手玉であった。石、骨、貝殻などによるお手玉で考えると、この遊びは世界中でおこなわれているし、その歴史も記録されているだけでも三千年に及ぶ。まさにお手玉は世界的無形文化財といってもよい遊びなのである。

〈石けり〉

石けりの発生は、古代ギリシアの宗教的シンボルであ

るラビュリントスで、キリスト教などの宗教的行事や造園設備に用いられ、それらが子どもたちの遊びの中に定着していったものらしい。

石けり遊びは、日本にも古くからと思われるようだが、江戸時代末期に刊行された遊び関係に詳しい書物『嬉遊笑覧』（文政十三年刊）や『守貞漫稿』（嘉永六年刊）には記載されていない。したがって、石けりの日本への伝来は、おそらく明治になってからであろうと思われる。そして、昭和四十年代までは盛んにおこなわれていたが、今は見るかげもなく衰退している。

シルクロードでは、石けりはどの調査地点でもおこなわれていたし、通りすがりに見ることもしばしばであった。

漢族の子どもたちの場合、その名称はほぼ似かよっていて、跳房^{テイクファン}子（安西、敦煌南街小、コルラ）、跳房^{テイクファン}房（酒泉）、跳盒盒（敦煌东街小）、跳方格（ウルムチ）などである。ウイグル族の子どもたちの名称は、ドウザ（トルファン）とかセンペール（イーニン）というもの

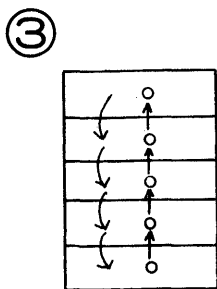
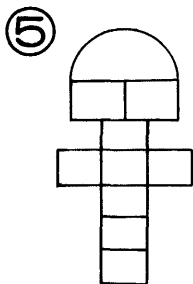
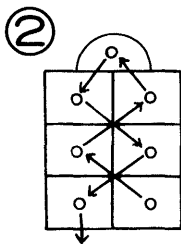
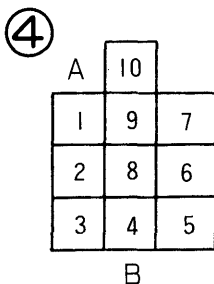
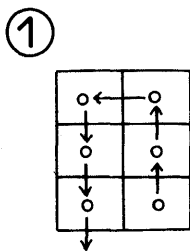
であった。

石けり方式、けんば方式どちらもおこなわれているが、最近は石を使うことはほとんどなく、砂を袋に入れ



▲シルクロードの子どもたちの石けり（張掖にて）

◀ 石けりの図形



た沙包サポウが使われている。地面に描く図形は、四角形とかかし形で、円形をつらねて描くのはハミの小学校の先生からきいた跳単双フレイヤンツウサウエン一ケースのみであった。

特徴的なものを紹介してみると、まず一つは、安西でおこなわれている石けり方式の跳房子で、二つのけり方がある。①のように、沙包を投げ入れて行っていく場合は休むことができないが、②のように交差して行っていく場合は、上の半円形の部分で足をつけて休んでよいというルールであった。

ハミの漢族の小学校で高学年の女の子がやっていた四フ条柱チヤウヂ、またはブンブンチュエチャという名称のものは、大きなバリエーションがあった。③のような図形を描き、沙包（お手玉の二倍くらい）をまず最初の区割に入れ、けんけんではなく、歩きながら次々と区割に入れていく。最後の区割で、沙包を両足ではさんで後にはね上げ、前にまわし、両ひざではさんで受けとめる。そのまま区割を跳んで帰り、最初の区割になると、もう一度両足にはさんで後にはね上げ、前にまわし、手で受けと

める。成功すると沙包を第二段階の区割に投げ入れ、同様の所作をくり返していくというルールであった。これは、相当な熟練を要すると思われる。

トルファンでおこなわれているドウザは、④のような図形を描く。以前は石を使っていたが、今は円形の平らな缶に砂を入れたものを使う。石けり方式でやっていくのであるが、1から7までの区割に投げ入れる時はA地点、8と9の区割に投げ入れる時はB地点に後向きに立つ。10は前向きでよい。注目をひくのは、善人は9で成功して極楽に行けるが、悪人は9で失敗して地獄へ落ちると言い伝えていることである。古代ギリシアにつながる宗教的意味あいを感じられて興味深い。

⑤のような日本でもよくみられるかかし形の図形もあって、これは河西回廊の張掖、コルラ（漢族の子ども）、イーニン（漢族の子ども）などでみられた。

〈凧あげ〉

凧の起源もずい分古い。西洋では、紀元前四百年ころギ



▲シルクロードの子どもの手づくり凧（玉門鎮にて）

リシアの哲学者プラトンの肖像を描いた凧を、友人のアルキタスがあげたのが最初だといわれている。東洋では紀元前二百年ころ、漢の武將韓信が敵城との距離を測る

ために凧を利用したものがそのおこりだとされている。

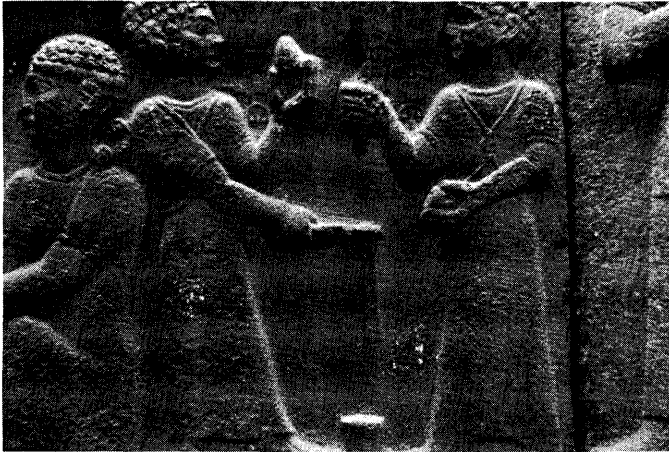
日本における凧の記録は平安時代前期であり、紙老鴞しろうしとか紙鷲しえんという名称が使われている。ギリシアや中国に比べるとかなり遅いが、竹材や良質の和紙、浮世絵や木版の技術などに恵まれ、形や図柄において多様なものが生みだされ、豊かな凧文化の形成がおこなわれた。

今では世界中の子どもたちが凧あげをしているが、シルクロードでは、三月に入って凧が強くなってくると、凧あげが始まる。漢族の子どもたちは共通に風箏フンズと呼び、凧あげを放風箏ホウフンズと言っている。ウイグル族の場合には、シュプラッカ（トルファン）とかレギレッキ（イーニン）などと呼んでいる。

市販の凧もあるが、手づくりが多く、形も鳥、蝶、飛行機などいろいろのものを見かけた。敦煌の小学校では三月末ごろに凧あげ大会をするが、市販の凧をもつてくるのは百人中二、三人程度だということであった。シルクロードには、まだ手づくりの文化がしっかり定着しているようである。

〈こままわし〉

こまの起原は、おそらく木の実や貝殻を指先でひねっ



▲アナトリア文明博物館の鞭ごまのレリーフ

▼こまの胴を紐鞭でたたいて、回転を
与えて回す。くり返し鞭でたたく。



て回すことにあつただらうと思う。紀元前一千年ころには、木を円錐形に削り、紐鞭でたたいて回す鞭こまがつくりだされている。ギリシア時代のこまもこれであつた。

日本では、『日本書記』雄略天皇紀に、筑紫に駐屯してい

た高麗^{こま}の兵がこまをわしに興じていたという記述があるようだから、唐時代の中国から高麗を経て伝来したものであろう。名称も高麗^{こま}にちなんでいるものと思われる。

ろくろ挽物細工の発達している日本では、じつに多様なこまがつくりだされているが、ヨーロッパでもアジアでも、今だに鞭こまが一般的である。

シルクロードの子どもたちのこまも、鞭こま一色であつた。このこまは胴体に鞭の紐部分を巻いて回し、紐鞭でたたいて回転力をつける。名称は、漢族の場合、打^ダ猴^{モウ}（酒泉、敦煌）または打牛^{ダニウ}（安西、ハミ、コルラ、イーニン）の二種類があり、ウイグル族の場合はヌル（トルファン）、ペケルゴシ（イーニン）などと呼んでいた。

シルクロードの各地では、冬期氷の上でこのこまを回す。だから、氷に接する先端部に鉄の芯が打ちこまれている。

（京都大学教育学部）